

# 100年に1度のまちづくりと多文化共生 子育て世代を呼び込む現代版宿場町の創造

## 時空を越え交流都市を育み続ける 絶妙な立ち位置

日本列島(太平洋側)の中央部に位置する愛知県の県域は、県都・名古屋市を含む西側の尾張地方と東側の三河地方(三河は西三河地方・東三河地方に区分)に大別される。そして知立市は、愛知県のさらに真ん中、西三河地方に位置している。

周知のように、全国一の工業出荷額を達成し続ける愛知県は、中京工業地帯の中心地だ。中でも西三河地方は豊田市を中心に、自動車関連産業の立地が重層的かつ高密度に進んでいる。それを支える中小企業の数も多く、中京工業地帯の核を担うエリアの一つだ。知立市はそんな西三河地方でもひとときわ工業立地の進む豊田市・刈谷市・安城市に囲まれ、名古屋市中心部からも20〜30km圏内に位置する面積約16km<sup>2</sup>のコンパクトシティだ。

自らが工業都市としての基盤を備えている上に、周辺都市の持つ良好な雇用環境の恩恵をも享受できる、ベッドタウンとして絶好の条件を備えているといえる。実際、知立市の人口は約4万人で始まった昭和45(1970)年の市制施行から順調に伸び続け、令和3(2021)年12月1日現在、7万2086人に達している。

「知立市が昭和45年に市制施行できたのは、昭和42(1967)年に知立団地が完成したのに伴い、人口の増加や都市化が急速に進展していったことなどが、一つの大きな契機になりました。それは同時にベッドタウン化への本格的なスタートともなりました。知立市がそのような形で急速な発展を見るに至った最大の理由は、何と言っても交通の便の良さにあります。具体的には、まず市域内を国道1号(旧東海道)や23号(知立バイパス)、155号、419号などの幹線道路が縦横に走っています。鉄道は岐阜駅〜名古屋駅〜豊橋駅を

おおくは いくは  
はやし 林 知立市長



結ぶ名鉄・名古屋本線が知立駅を通り、名古屋駅には快速特急を利用すれば約20分で行けます。知立駅は同時に、豊田市方面、および碧南市方面へと南北二方向に展開する名鉄・三河線の起点にもなっています。

別の言い方をしますと、知立市は名古屋市方面から見れば西三河地方・東三河地方への玄関口、東三河地方や西三河地方から見れば、県都・名古屋市(尾張地方)方面への玄関口としての役割も果たしていることになりす。周辺の各方面を結びつける結



知立駅周辺で進む連続立体交差事業と駅前広場の将来イメージ



節点で、典型的な《交流都市》としての地理的特徴を備えているといえます」  
 そう語る林郁夫知立市長は、昭和58（1983）年に知立市へ職員として入庁。平成14（2002）年から2期にわたり知立市議会議員を務めた後、平成20（2008）年12月に市長に就任、取材時の令和3年12月の時点でちょうど4期14年目を迎える。



知立駅前にそびえる再開発ビル「エキタス知立」（手前のバスは市内循環のミニバス）

「知立市が5年に1回の国勢調査で初めて人口7万人を超えたのは、平成27（2015）年でしたが、その当時の知立市の昼間人口は約5万8000人。今も同様の様相を呈しておりますので、そうした人口面の特徴から知立市をあえて一言で表現すれば『近隣市の自動車産業関連企業や名古屋市中で働く市民の多いベッドタウン』と言うことも、できるかもしれません（笑）。  
 ただ、少子高齢化の波はさすがに免れず、高齢化率は少しづつ高まっています。例えば令和2（2020）年度の高齢化率は19・9%と言えますが、上昇傾向にあるのは間違いありません。」



ません。合計特殊出生率も数年前まで1・8台を維持していたものの、現在は1・7台で推移しています。大都市圏で1・7台は悪くないともされますが、やはり2・0以上を目指す努力をしなければ、じり貧になる可能性があります。そういう意味では人口を順調に伸ばしてきたとはいえ、知立市は現在いろいろな意味で、都市としての岐路に立たされていることも事実なのです。  
 そのように冷静に現状を見つめた上で、国立社会保障・人口問題研究所（社人研）の将来人口推計をいかに覆していくかが、現行『第6次知立市総合計画』の眼目の一つにもなっています。幸い社人研の『平成32（2020）年頃の約7万人をピークに人口は減少傾向に移る』という当初の予測に対し、知立市の人口は令和に入っても、ほぼ横ばい状態の7万2000人台を保っています。」



池鯉鮒宿時代の面影を伝える東海道松並木

この知立駅周辺整備事業には、鉄道の連続立体交差事業、土地区画整理事業、駅北側の市街地再開発事業による新たなまちづくり事業（街路事業、公園事業なども含む）が複合的に組み合わされている。その規模の大きさは前頁の写真にある通り、知立駅に到着した瞬間に体感できる。中でも、複合的な整備事業の核を成しているのは、やはり連続立体交差事

業だ。

今後は引き続き、他の都市で暮らす子育て世代には、知立市で子育てしたいと思っただけいなままちづくりを、現在暮らしていただいている全ての世代の市民には、このまま暮らし続けていきたいと思っただけいなままちづくりを積極的に実践していくこと。それが何より肝要ということを常に意識しながら、施策・事業を多角的に展開してまいりたいと思います」（林市長）

知立市では現在、その強力な推進エンジンになりそうな事業が、大規模かつ複合的に進められている。《100年に1度》とも表現される、知立駅周辺整備事業の数々だ。

## 新たな価値を全国に発信する 100年に1度のまちづくり

業だ。

「連続立体交差事業は、名鉄・三河線で3.5km、名鉄・名古屋本線で1.5kmにわたり実施されます。総延長約5kmの鉄道を高架にする大事業で、愛知県内の鉄道高架事業の中でも最大規模です。

それに併せて駅周辺を区画整理し、市街地の再開発を実施していくわけですが、端的に言えば良好な住環境を創出し、定住人口や交流人口をまず増やしたいですね。付随して、経済効果や税収効果を多角的に生み出し、さらに新たな文化や価値を全国に発信していきたい。少し欲張りに映るかもしれませんが（笑）、そんな強い期待を、知立駅周辺整備事業には抱いております」（林市長）

連続立体交差事業は令和10（2028）年度中に竣工予定だが、知立駅北側には平成31（2019）年に地上21階・地下1階の再開発ビル《エキタス知立》が竣工している。また、中町銀座地区では、地上12階・地下2階、地上10階・地下1階の多目的ツインビル《リリオN棟・S棟》がやはり完成済みだ。それ以外にも駅周辺を歩くと、竣工したばかりの民間ビル、民間デベロッパーの建設工事予定用地などが随所で見られる。

これから約7年間にわたる連続立体交差事業の進捗と共に、これらの事業用地からも地域の槌音が鳴り響くことになる。

「ただ、私たちがとってそれは、単に工事の進捗を告げるだけの槌音ではなく、知立市



再現された池鯉鮒宿時代の旅籠屋の店先（知立市歴史民俗資料館）

の新たな価値を発信し、未来の街並みについてのコンセプトを示していくような槌音になるものでなければ、意味がありません。換言すれば知立駅周辺地区が、知立市の玄関口にふさわしい、新たな《顔》となるような整備をしていかなければ、子育て世代も含め、新たに人を呼び込むことは難しくなるでしょう。

そのような観点から、知立市では平成27年度から平成29（2017）年度にかけ、市民有志による市民部会と、職員有志による職員部会で構成された《知立駅周辺街並みデザインプロジェクト会議》を設置し、街並みの骨格となるべき公共空間（道路・公園・駅前広場など）のデザインの在り方を検討しました。その結果として導き出されたコンセプトが

# 知立市

(愛知県)

市 政 ル ポ

## 悠久の歴史に培われた 市民力がもたらす地域の包容力

「例えば平安時代に成立したとされる『伊

域全体が平たんであるために、道づくりやまちづくりがしやすく、近世には東海道五十三次の39番目の宿場町・池鯉鮒ちりゅうじゆく宿として大いに栄えた。また、中世には鎌倉街道の要衝としても機能していて、三河や尾張全域から人々が集い、三河の特産である馬市や木綿市が古くから開かれていた。それは牛市や鯖市などに姿を変えながら、昭和初期まで続いた。つまり、人・モノ・情報が知立(池鯉鮒)を軸に四方八方から集まっては、知立を中継し、各地に広がっていったのだ。

さらに、交流都市・知立の歴史の始まりは、古代へとさかのぼれる。



池鯉鮒宿時代には将軍上洛用の宿舎もあった、戦国時代の知立古城跡(現在は児童遊園)

《現代版宿場町》の創造で  
す」(林市長)

知立市の交通環境の至便さ、交流都市としての立ち位置は、歴史的に見ても伝統的な特徴だ。前述したように、知立市は西三河・東三河を合わせた三河地方全体の中でも2番目に面積の小さい、約16km<sup>2</sup>の非常にコンパクトなまちだ。しかし、地



在原業平の供養塔がある知立・八橋の業平塚

勢物語』では、在原業平ありわらのなりひらとされる主人公が『からころもきつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞおもふ』という歌(各句の頭をつなげると「かきつばた」になる折句技法)を、東下りの旅の途上で、知立・八橋に咲くかきつばたを見て詠んだとされています。

『源氏物語』と並ぶ存在の『伊勢物語』で知立の名所が紹介されたことで、数えきれないほどの人々が時空を越え、知立に来てくださいました。人々が行き交うまちである知立の歴史は、そのような形においても、1000年以上前から蓄積されてきたのです」(林市長)

ちなみに知立・八橋のかきつばたは、現行・五千円札の図柄の原画となった国宝『燕子花かきつばた』



伊勢物語の昔からこの地を彩る知立・八橋のかきつばた

『屏風(尾形光琳)のモデルとされる。尾形光琳には、やはり、かきつばたをモチーフにした国宝の工芸品『八橋蒔絵螺鈿硯箱』もあり、こちらには「八橋」の地名がきちんと入っている。江戸時代を代表する芸術家・尾形光琳がいかに知立・八橋のかきつばたに深い思い入れを抱いていたかがしのばれる。

「それらのレプリカは知立市も所有しています。そこで改めて想起されるのは、1000年以上も前に歌に詠まれた知立・八橋のかきつばたが、今も健在だという事実です。1000年の歴史と私たちは一言で言いますが、その裏には何十世代にもわたって、連綿と栽培し続けてきた地域の人々の努力があるわけです。今風の言葉で言えば、知立にはそうした



知立公園「花しょうぶ園」の花しょうぶは、昭和31・32・35年の3回にわたり明治神宮から移植されたもの



地域の人々が守り保全してきた知立神社の多宝塔

《市民力》の蓄積があるのです。

また知立市には、やはり創建から1200年近くの歴史を誇る知立神社があります。ここには国の登録有形文化財『拝殿』の他に、国指定重要文化財の『多宝塔』があります。この多宝塔はもともと、神仏混交時代の知立神社境内にあつ

た神宮寺という古刹こさつに付属する建物でしたが、明治維新の際の廃仏毀釈はいぶつきしやくで破壊されそうになりました。それを忍びないと考えた地域の人々が神社の建物として現在まで伝え、国指定の重要文化財になっているのです。

先ごろユネスコ無形文化遺産に登録された知立まつりの《知立の山車文楽とからくり》も同様に、地域の人々が江戸

時代から継承してくる間に唯一無二の存在となり、世界の宝にまでなりました。

こうした貴重な地域財産の存在そのもの

が、地域の人々の地元の宝を愛する力、すなわち大いなる《市民力》の発露の事例と言えます。それは同時に古代から、さまざまな土地から訪れてくる人々との交流などによって培われ、地域に蓄積された、知立の土地柄としての《包容力》を証明するものとも、私は考えています」(林市長)

知立市の土地柄としての《包容力》の豊かさは、例えば知立市における《多文化共生のまちづくり》においても、濃厚に見て取ることができます。

### 多文化の子どもたちが育ち合う SDGs 未来都市計画!!

自動車産業の盛んな西三河地方は全体的に、外国人居住者の数が多い。知立市の場合令和3年12月の統計では、全人口7万2086人のうち7%以上に当たる5143人が外国人居住者であり、これは愛知県内でも高い外国人集住率となっている。

外国人の集住は1990年代後半から続く、知立市の「日常」といえる。リーマンショック後など、一時的に居住者数が減少することもあったが、近年は総人口に占める割合が6〜7%の高水準を保っている。外国人居住者に対する各種施策が、他都市以上に重要になってくるのは言うまでもない。

「知立市は令和3年、内閣府から《SDGs 未来都市》に選定されました。その提案書の



「知立の山車文楽とからくり」は、文楽とからくりを山車の上で上演する唯一無二の存在(知立まつり)

タイトルは『多文化共生の未来都市知立を目指して〜日本人・外国人誰一人取り残さない持続可能なまちづくり〜』です。SDGsのまちづくりの対象となる取り組みはさまざま、全国の自治体がそれぞれの特徴に合った施策・事業を推進しておられますが、知立市のテーマは《多文化共生の未来都市知立》なのです。

これは何も、SDGsへの取り組みの必要から生まれた考え方ではなく、知立市では外国人との共生は30年ほど前から当たり前のことでした。例えば知立市には外国人の生徒の割合が70%に近い小学校や20%に近い中学校があります。その小中学校では13カ国の児童生徒と一緒に学んでいます。日常的に地域内

# 知立市

市 政 ル ポ

(愛知県)



多国籍の親子の利用も日常的な風景の子育て支援センター（写真は知立市中央子育てセンター）

とに一つずつ配置された子育て支援センターと知立市保健センターが連携して行う切れ目のない子育て支援《にじいろニコニコ事業》や、充実した産後ケアの推進など、子育て支援全般の手厚さに定評がある。

同様に、保育園では保育士を国の基準より多く配置しているほか、小中学校におけるサポート教員の数も基準より多く配置し、発達障がい児への対応を含めたスムーズな学級運営を多角的に図るなど、教育支援についても、きめ細かい配慮が目立つ。

また、共働き家庭などの児童を対象とする《放課後児童クラブ》や、家庭の条件とは関係なく、放課後の安心安全な居場所として誰もが利用できる《放課後子ども教室》を設置して

で留学しているようなもので、そうした小中学校を卒業した子どもたちの《国際化》に対する意識は筋金入りと言えます。まちなかに外国人のいる日常はごく普通のことです。これもまた知立市の新たな土地柄として、今後どのように開花し、発信されていくのか、楽しみでなりません」（林市長）

知立市は中学校区ご



市のマスコットキャラクター「ちりゅっぴ」

おり、子ども本位の教育支援・生活支援の施策を徹底している。

ここで特筆すべきなのは、そうした子どもたちに対する手厚い姿勢が日本人の児童生徒だけでなく、外国人の子どもたちに対する取り組みについても共通しているという事実だ。

「例えば知立市では、他市に先駆け、いち早く小学校の35人学級を実現してきましたが、外国人の子どももその中に普通に入っています。さらに外国人の子どもたちに対しては、言葉の習熟度でクラス編成を変えるなど、無理のない溶け込みへの工夫を行いながら、日本人の子どもたちと共に安心して学び合い、育ち合えるような環境の整備に努めております」（林市長）

知立市では多文化共生の未来都市を実現するための施策の目標として「日本人・外国人が理解し合う子育てしやすいまち」「日本人・外国人共に仕事で活躍できる賑わい溢れるグローバルシティ」「日本人・外国人が協働するクリーンなまち」を掲げている。

脱炭素社会を目指す環境問題への取り組み



冬の風物詩・知立ドリームイルミネーション(12月、新地公園)

はもちろんだが、持続可能なまちづくりには不可欠な、少子高齢化や人口減少の抑制を目指すための地域活性化施策の全ての基盤の一つに、多文化共生社会ならではの立ち位置が明確に反映されている。

知立市の玄関口・知立駅周辺で進む100年に1度のまちづくりの背景には、日本中の人々が交流してきた古代から中世の知立、近世の池鯉鮒などを通じて培われた《市民力》や《包容力》を基盤に、国際的なスケールでの取り組みによる、誰もが参加し、地域の一員となれる交流都市、すなわち《現代版宿場町》創造の実現を目指す熱い思いが、脈々と息づいているのだ。

(取材・文〓遠藤隆／取材日〓令和3年12月22日)